

プロフィール

ALLAHYARIE ABDUR RAUOF 氏

(アラヤリ アブドル ラウフ)

1954年 アフガニスタン中央部 (ハザラジャート)
ガズニ県 タブクス村に生まれる
民族：ハザラ族

1985年 来日

1990年 アフガニスタントレーディング (有) 設立
現在 吉祥寺でアフガニスタン バザール 経営

プロフィール

木村 晋介 氏 (きむら しんすけ)

1945年 長崎生まれ

1967年 中央大学卒業

1970年 弁護士開業

木村晋介法律事務所所長

(株)日本消費生活アドバイザー・コンサルタント協会理事

日本カンボジア法律家の会代表

東京商工会議所倒産防止特別相談事業専門スタッフ

《その他》

サリン事件共助基金運営副委員長

リカバリー・サポート・センター理事長ソフトエアガン安全会議代表委員

大学在学中は、作家の椎名誠らと同じ下宿で共同生活を送る。

消費者問題、犯罪被害者救済、プライバシー問題などに深く関わり
著作やテレビ・ラジオ出演など幅広く活動。

最近ではカンボジアの弁護士養成のための国際協力に力をいれている。

近 著 「遺言状を書いてみる」 ちくま新書
「キムラ弁護士の友情原論」 角川文庫
「超能力株式会社の未来」 本の雑誌社 (対談集)

主な著書 「新消費者取引判例ガイド」 有斐閣
「二十歳の法律ガイド」 有斐閣 共著
「六十歳の法律ガイド」 有斐閣 共著
「裁判がよく分かる本」 廣濟堂出版 監修
「僕の考えた死の準備」 法研
「ところで、人権です」 岩波ブックレット 共著
「キムラ弁護士が駆けてゆく」 角川文庫
「キムラ弁護士がうさぎ跳び」 角川文庫

「長崎ルパン物語」 角川文庫
「見はてぬ夢にサイドアタック」 筑摩書房 対談集
「八丈島のロックンロール」 筑摩書房
「竹林からかぐや姫」 筑摩書房
「夜の法律相談」 廣濟堂出版
「ネコのために遺言を書くとすれば」 本の雑誌社

連載など 「キムラ弁護士のとまどい日記」 本の雑誌社
「木村晋介弁護士のなんでも法律相談」 毎日が発見 (ファンケル出版)

プロフィール

苑原 俊明氏 (そのはら としあき)

1999年より大東文化大学法学部教授
国際法・国際組織法担当

論文他

- (1) 「先住民族の権利」 国際法学会 編
「日本と国際法の100年」第4巻『人権』所収 (130～153頁) 三省堂 2001年
- (2) 「世界人権宣言と国連の人権基準設定活動」
国際人権法学会1999年報『国際人権』第10号 (18～22頁) 信山社 1999年
- (3) 「先住マイノリティの権利保障—国際人権条約とアイヌ民族」
『法学セミナー』44巻2号1999年2月号 (44～45頁)

プロフィール

谷山 博史 氏 (たにやま ひろし)

- 1958年 東京生まれ
1982年 中央大学卒業 (政治部)、同大学院入学。
在学中からボランティアとしてJVCに参加
1986年 同大学院法律研究科修士課程終了
JVCにスタッフとして参加
タイ、カンボジア国境のカオイダン難民キャンプで技術学校担当として活動
1988年 JVCラオス代表
JVCカンボジア代表、及びインドシナ地域調整担当を兼任
1993年 JVC事務局長をJVCカンボジア代表と兼任
1994年 帰国。JVC事務局長

著 書

- 「NGOの挑戦」上下 共著 めこん社
「地球人として生きる」 共著 岩波ジュニア新書

現 職 日本国際ボランティアセンター事務局長

2001年12月17日

第11回 公開法律シンポジウム レジюме

大東文化大学法学部教授 苑原 俊明

アフガン「難民」とわたしたち

- 1, はじめに
- 2, 「難民」とは資料 (5)
 - 国連難民条約その他資料 (1)
 - 国連難民高等弁務官 (UNHCR) の任務
 - 難民認定の手續資料 (2)
- 3, アフガン「難民」申請者に関する最近の事件
 - 申請者収容の経緯資料 (3) (4) (5)
 - 裁判所の立場資料 (6)
 - 問題点資料 (7)
- 4, おわりに

小松法学研究所長 皆さん、こんにちは。第11回目のシンポジウムを開催いたします。私は、法学研究所の所長をしております小松でございます。最初に一言ご挨拶申し上げたいと思います。

このシンポジウムは年1回行っておりますが、今回で11回目になります。91年から始めまして、毎年その年の一番関心のあった、社会の耳目を集めたような事件といたしましうか法律問題を取り上げて、それについて講師の先生にお話しをいただいて、会場の方々と質疑をして問題についての理解を深めようと、こういう趣旨で企画しております。今までいろいろな問題を取り上げてやりましたが、今年の場合は同時テロからのアフガニスタンの問題が一番関心があったのではないかということで、その問題を取り上げて企画いたしました。幸いといひましようか、現地の方をお迎えすることができましたので、生々しい状況を含めてお話を伺えると思いますので、どうぞ皆さん、活発に議論をお願いしたいと思います。

今年は、先生方のご都合、大学の都合もあって本日の開催となりました。ですが、今年は月曜日が休みになる日が多いものですから、本日も授業が行なわれております。授業が終わりましたらまた増えてくると思います。どうぞ、人数ではなくて質の高い議論をお願いしたいと思います。

司会は、今回も木村弁護士をお願いすることになりました。講師の先生方は、プロフィールを資料として差し上げてありますので、詳しくはそちらのほうをご覧いただきたいと思ひます。

アラヤリさんは、日本に長く滞在なさっているアフガニスタンご出身の方です。

隣の谷山先生は、国際人権問題でボランティアとして広く活動されている方でございますので、具体的な事例をいろいろ詳しく伺えるかと思ひます。

その隣が本学の国際法の苑原教授であります。国際法の問題、難民問題を取り上げて説明いただけると思ひます。国際人権問題を広く研究されています。

4人の方をお願いいたしますので、どうぞ活発に議論をお願いしたいと思います。

木村 それでは始めさせていただきます。

11回やろうと最初から思っていたわけではありませんで、とりあえず始めてみようということで、その年に大変有名な離婚事件がありまして、これを機会に家族法について考えてみようということでやったのが最初でして、もちろんオウム真理教のこともやりましたし、少年法のこともやりましたし、いろいろ日本の裁判制度はこれから変わっていくぞという問題についても扱ってきたわけですが、今年は何といつてもアメリカへのテロ、9月11日の事件、それからアフガニスタンでの戦争、これがやはりどう考えても一番重さを持っている事件です。これをテーマにお話をしていきたいと思ひます。

アラヤリ・アブドル・ラウフさんは、いらしたのはソ連が侵攻したときですね。

ラウフ そうです。

木村 ソ連がアフガニスタンに攻め入ったときですから、16年前。16年前ということになりますと、私がちょうど40ですから、大分時間は前ですけども、最初に、どうして自分の祖国を出なければならなかったのかということについてお話をさせていただきたいと思ひます。

ラウフ 皆さん、こんにちは。日本語はまだよく話ができませんけれども、とりあえず、

皆さん、気にしないでください。ゆっくり話しますから。

1977年、アフガニスタンの中にクーデターが起きました。このクーデターはアフガニスタンの共産党で、前のアフガニスタン政府は全部倒れた。全アフガニスタン人が、共産党に非常にいやなイメージを持っていたんです、最初から。私も、共産党のやり方、共産党の命令、共産党の方針がアフガニスタン人のために非常にきついと思いながら、これからアフガニスタンの中で生活するのは非常にきついかなど思っていたんです。

クーデターをする前に、いろいろな外国人がいろいろな国からアフガニスタンの国の中にたくさんいらしたんです、観光旅行で。私も外国人といろいろ話をしながら仲良くしたり、仕事の案内とか、特にアフガニスタンのバーミヤンを見ろというツーリスト案内の仕事をしたことはいっぱいあります。

木村　　バーミヤンの洞窟の仏像なんかを案内していたの？

ラウフ　案内してました。

私は、考え方が共産党の考え方じゃなかったから、どうしても自由な生活が欲しかったんです。この辺が、共産党になってから、アフガニスタンの中で、だんだんだんだん、生活のやり方が非常にきつくなっちゃった。彼等のやり方は、アフガニスタンの意見の中に自然的に合わなかったから、どんなアフガニスタン人も彼等のことを非常に嫌いだったんです。私もどうしても共産党がとっても嫌いだったから、アフガニスタンの中で生活するのは非常に不便かなと思って、カブールから田舎のほうに引っ越したんです。ソ連軍が直接アフガニスタンの中に侵攻したときに、私はアフガニスタンの田舎のほうに行っただけです。もちろんソ連軍が侵攻したときは、私は自分の目で見て、アフガニスタンの中はこれからどうなるか非常に詳しく勉強しました。まずは共産党が嫌い、2番目はロシアのやり方もやっぱり嫌いですから、どうしてもアフガニスタンから私は出なければならぬかなと思ったんです。

なぜですか。私が一番嫌いなのは戦争です。一番いやなイメージを持っているのは戦争です。特に軍の名前を聞くと、必ず気持ち悪くなります。まずは、軍になっちゃうから、軍の話が出てきたら必ず気持ちが悪くなりますから、そのときはアフガニスタンから私は自然的に自分で決めて出てきたんです。パキスタンへ出て、パキスタンからどこへ行こうかなと考えた。そして、自分のイメージの中で一番近い感じがしたのが日本です。

なぜですか。私はアフガニスタン人の中のハザラ族です。ハザラ族はモンゴル族ですから、いくら考えても、アメリカへ行けば必ずイメージが合わないですね。ヨーロッパへ行っても、やっぱりイメージが合わないんです。必ず仲良くすることはできないと思いながら、どうしても日本に行ったほうがいいかなと思ったんです。なぜかという、アフガニスタンを出る前に、日本人と会ったり話をしたり仲良くしたことがいっぱいありますから。その点で日本を選んで、日本に来ました。

木村　　どんな日本人と、どこで会ったんですか。

ラウフ　カブールは、そのときは一番観光旅行が多かったのは日本人だったです。学生、商売をする人とか、特に年をとった人たちは、わざわざバーミヤンの仏陀を見に来たとか。観光旅行の中で一番多かったのは、日本人が一番多かったです。

木村　　実際に日本に来られて、どんなことでびっくりされましたか。

ラウフ　日本に来たときに、最初はもちろん少しきつかったけれども、だんだんだんだ

ん慣れて、今のところおかげさまで全然問題はございません。

木村 奥様も日本人で、お子さんが4人いらっしゃる。こういう方です。

最初に、会場の方からラウフさんに質問をしていただきたいと思います。どんな質問でも結構です。

ラウフ まずは、皆さん、アフガニスタン人のことを心配していただいて、本当にありがとうございます。日本の今のやり方は、アフガニスタンの人にとってはとっても感謝しています。これは素晴らしい話です。日本政府も、日本人も、皆さんがアフガニスタンのことを非常に心配しています。これからもアフガニスタンのためにやりたいという人もいっぱいいます。これは、心から私はありがたいと思っています。皆さん、本当にありがとうございます。

アメリカの貿易センターのことなんですけれども、私はこれは非常に残忍なことと思います。やった人とか命令を出した人たちは、本当のこと最低だと思います。人々の人生が犠牲になって、なぜ、誰のため。私たちは人間ですから、なぜそういうことをしなければならぬか。これは本当のこと非常に寂しいです。私たちはアフガニスタン人として、一番最低と思います。貿易センターのこと、これはアフガニスタン人は一切関係ありません。それは皆さんご存じのように。神様も一切関係ありません。本当のこと、イスラムも一切関係ありませんから。この辺は一度皆さんでちゃんと調べていただいてから判断したほうが一番いいかなと思います。もちろん日本人全体が、アメリカの貿易センターの問題はアフガニスタン人のせいじゃない、これはわかりますよ。

これからも、ぜひアフガニスタンのことを忘れないように。最初は非常に温かかったよ。ニューヨークの問題が出たとき、アメリカが空爆を始めたときも非常に温かかったんだけど、だんだん冷たくなる可能性あるから。私たちアフガニスタン人の問題は、これから始まるんです。国を100%壊しているから、何も残っていないのです。干ばつも非常に大変です。この辺、私たちアフガニスタン人として、皆さん協力してほしいです。どんな世界でも、アメリカなら、日本人なら、ヨーロッパなら。ただ、自分の目的が決まってからアフガニスタン人を助けていただいたほうが一番正しいと思います。ぜひよろしく願いいたします。

フロアA 一般的な質問で申しわけないのですが、ハザラ族の方は一般的にシーア派の方が多そうですね。シーア派は、ムスリムの中でも粗略に扱われているのでしょうか。スンニ一派等の他の派閥の場合は、アラビア語でお祈りをしますね、コーランは。シーア派はペルシャ語でしたっけ。ムスリムの中でも粗略に扱われるのではないかという話を前にお伺いしたことがあるのですが。

フロアB 日本においては、政治と宗教は自由でございますが、別に「この宗教はだめだ」というふうにはしないのですが、アフガンの国ではどういう形で宗教が認められていたか、宗教上のいさかいが非常に多いと思うのですが、それをお聞きしたいと思います。

フロアC 「故郷への支援を続ける」と名前のところに書いてありますが、実際どういう活動をしているのかということを知りたいです。

木村 それでは、今の質問の順序を逆にしまして、どういう支援をしていらっしゃるか、アフガニスタンでいろいろな宗教が認められているかどうか、それからシーア派とかスンニ派とか、そういう問題について、その順序でいきましょう。

ラウフ 私は、今、東京で「アフガニスタンバザール」というお店をやっていますが、

自分のほうからもアフガニスタンのために何とかしなければならぬといつも思っています。ただ、私は一人ですから、本当のところ、いくら頑張ってもアフガニスタンのために何にもならないと思いますが、ただ、お店にお客さんがいらしたときに、これから私たちはアフガニスタンのためにいろいろ助けたいです、どうすればいいですか、という話はいっぱい聞きます。私は、「NGOのオフィスがいろいろ東京の中にありますから、皆さん調べていただくのが一番いいと思う」と返事します。たまに皆さんが来て、私たちはアフガニスタンのために服を出したいんです、食べ物を送りたいとか、いろいろなことが話題に出ますけれども、ただ私が説明するのは、今アフガニスタン人が困っているのは、アフガニスタンの国中で何でも壊しているから、できればNGOはまとめて一緒に、これからアフガニスタン人のために街をつくったり、道をつくったり、アフガニスタンの経済を直したり、いろいろあるから、この辺ちゃんとゼロから頑張っていたかかないと、人々がいろいろ個別にやると目的に届かないと思います。

木村 バラバラにやっていたのではだめで、やっぱりNGO全体で統一のとれた支援をしていかないと。

ラウフ 自分一人ひとりでやるというのは何もできないと思いますから、この辺、できればまとめて、例えば外務省からでもいいし、普通の国民の決めたNGOでもいいんですけども、一緒にまとめてやっていただければいいかなと思います。

木村 その辺の内容については、後でまた谷山さんから補足があると思います。

今、ラウフさんは、吉祥寺で絨毯屋さんをやっていて、売れた絨毯の売上げの一部を故郷に送っていらっしゃるみたいです。

ラウフ 私は、今のところ、自分の売上げから20%。これは私のプロポーザルじゃなくて、私の奥さんが選んだものです。彼女が私に、できるだけアフガニスタン人のためにするようにといます。私たちはほかに何もできないから。特に私の生まれたところに売上げから20%出さなさいという話が出てきて、私もすごくうれしい。本当にいい話を聞いて、すばらしいと思いながら、これからできれば自分の支援をアフガニスタンに。今、生まれたところだけに私はしています。

木村 さて、それでは難しい宗教の話ですね。これは、皆さんがまず頭に描いているのは、内戦の話から聞くと、アフガニスタンに入ったらイスラム教徒じゃないといけないのかなとか、イスラム教徒の中にもいろいろ派閥があっていろいろ喧嘩しているのかなとか、そういうようなことだと思うのですね。

ラウフ 皆さんはもちろん人間ですね。神様が私たちのことをつくったものと思えば、どんな宗教でも、私たちは神様を信用してからお祈りします。そういうことですね。仏陀、イスラム教、ユダヤ教、キリスト教、何でも私の目の前で全く同じです。私はイスラム教のシーア派人として一番認められるのは、皆さんのお祈りのことです。どの宗教でも私の目の前では同じですから。皆さん、自分の方法があるじゃないですか。その方法で神様にお祈りすると思います。

イスラムは、考え方はとってもワイドです。とっても広いです。「必ずイスラムになってください」という話は一切ありません。「イスラムでなければ絶対に許さない」という話は一切ありません。

例えば、誰か「私はイスラム教になりたい」という話があれば、私たちは認められません。なぜですか。まずはイスラムについて勉強してイスラム教になってください。勉強しなければ、もしイスラム教になっても、これは無駄です。すぐに離れちゃうかもしれないから。この辺は、非常に大切にします。

いろいろ宗教があるじゃないですか。この辺、皆さんが好きなように神様にお祈りするから我々は認められないという話は、一切嘘ですから。なぜですか。これは神様のことです。イスラムのことではなくて、アフガニスタン人のことじゃなくて、例えばアラビア人のことじゃなくて、皆さんのことです。イスラム教徒として、皆さんと仲良くしたいんです。これは、私はイスラム教、皆さんの前に座ってという話じゃなくて、イスラム人としての命令が、皆さんと仲良くしなければならない。人間です。皆さんと同じですから。そういうことを非常に大切にしますから、皆さん、ムスリムはそういう話があるということは絶対にはないです。

例えばウサマ・ビンラディンのやり方は、これは人のやり方です。例えばオウム真理教みたいに、彼等はただ何でも自分のために欲しい。この人たちは、アフガニスタンの中でも、ほかの部族とかほかの宗教は認めなかったです。いやだと言った。でもこれは、イスラムの命令じゃないし、イスラムのやり方じゃない。イスラムの人は、どんな世界でも皆さんはきょうだいですから、仲良くしなければならないという話です。

木村 ウサマ・ビンラディン氏が言った言葉の中で、アメリカ人と、アメリカ人と仲良くしている人、それを殺すのがイスラム教徒の任務だというようなことを言った言葉がありますが、これは全然イスラム教からは出てこない。

ラウフ 私はムスリムですから、ムスリムとして、その話は一切認められません。なぜかというと、アメリカ人も人間ですからね。日本人も人間です。私達も人間です。選ぶのは、人間が別々、バラバラです。自然的に皆さんがちゃんと勉強してから正しい道を選ぶのです。イスラムが正しいか、仏教が正しいか、インドイズムが正しいか、キリスト教が正しいか、それは人間が選ぶのです。ウサマ・ビンラディンやタリバンのやり方は、彼等のやり方です。イスラムは一切関係ありません。コーランの中に、一切そういう話は書いていません。この話を今のところ皆さんは言うんですけども、私はとっても残念だと思います。イスラムのことをウサマ・ビンラディンを見てからいろいろ判断する、これは正しくないと思います。イスラムはイスラムですけども、ウサマ・ビンラディンはウサマ、タリバンはタリバンです。彼等は、アフガニスタンの中でも非常に苦しかったよ。後で説明しますから、私達は彼等でどのくらい問題を持っていたか。

木村 もう一つ、イスラム教の中にもいろいろ宗派があって、ラウフさんはシーア派ですか。

ラウフ そうです。

木村 例えばイランの中だとシーア派が強いけれども、アフガニスタンだとシーア派の人が少なくてすごく差別されたり、そういうことはありますか。

ラウフ イスラム教の中で、今、シーア派とスンニー派が一番ポイントですね。ほかにもいろいろ宗派はあるんですが、例えばワハビアとかいっぱいありますが、一番メインは今

のところシーア派とスンニー派です。イランは90%がシーア派なんだけれども、アフガニスタンの中で25%がシーア派です。だけど私の意見の中で、シーア派とスンニー派の間は余り違いはありません。シーア派もスンニー派も、神様も同じだし、コーランも同じだし、予言者も全く同じ。違うのは、意見です。シーア派人の意見がまた別、スンニー派人の意見がまた別。ファンデーションは、最初から最後まで全く同じだと思います。余り違いはありません。このシーア派とスンニー派は一番トラブル・メーカーがいますから、どうしてもシーア派とスンニー派は間に入っていろいろ問題をつくるという話がいっぱいあります。この辺は、私たちは最低と思います。

言葉は、彼はスンニー派人はアラビア語と言っていますが、シーア派は例えばダリーやペルシャ語で話します。インドの中に 700万ぐらいイスラム教がいますが、彼等は必ずウルドゥー語で話します。例えばアフガニスタンの中で、60%はダリー語で話して、40%はパシュトゥー語で話します。パキスタンは完全にウルドゥー語とパンジャブ語、いろいろあります。アラビア人がアラビアの国の中でアラビア語で話します。コーランは、完全 100%アラビア語です。だけどアラビア語の中にも、例えばアジャムとか、アラとか、ペルシャとか、アラブとか。私たちは、アラビア人でなくても、必ずコーランのことを勉強しなければならないから、アラビアの文字で読まなければならないです。お祈りも必ずアラビアの言葉でお祈りしなければならない。そういうことです。

例えば、今、日本人でもイスラム教になっている人はいっぱいいますが、この人たちはどうしても日本語で話をしなければならない。例えば案内は全部日本語で出ているから、どうしても日本語で勉強しなければならないし、日本語で読まなければならない。コーランも、今、日本語で書いてあるものもあります。

木村 むしろ日本のほうが例外だということですね。

ラウフ そうです。

木村 本当はアラビア語でコーランは読む。

ラウフ アラビア語で。あと、アラビア語と全く同じものを日本語で書いてあるのがあります。

木村 民族的にもいろいろな人がいるし、言葉もいろいろな言葉があって、僕たちは、すごくパシュトゥン人が多いというからパシュトゥン語が多いのかなと思ったら、ダリー語のほうが多いですね。コーランになったらみんなアラビア語で読んでいる。

ラウフ 例えばイスラムの命令の中で、アジア、日本、アメリカ、皆さん人間ですから、正しい道は誰ですかということは彼等が選ぶから、皆さん同じですから、アラビア語で話をしなくても大丈夫です。コーランだけがアラビア語ですから、お祈りだけアラビア語ですから、覚えたほうが一番正しいかと思いますが、できなければ、自分の言葉で覚えればいいんじゃないですか。インドネシア人は、全くアラビア語はわからないじゃないですか。マレーシア人も。中国の中でもいっぱいいますから。この人たちはアラビア語はわからないじゃないですか。こういうことです。

木村 わかりました。

先ほど支援の話がありました。私は、初めてカンボジアに行ったのが、今からちょうど10年前です。そのときにカンボジアのホテルで日本国際ボランティアセンターの人と待ち合わ

せをしました。街の中は、内戦が終わったばかりで、まだ煙が残っているような街並みだったので、その中で一生懸命カンボジアの復興のために運動しておられる日本人がいて聞いて、初めてそういう人に会いました。外国に行くときすぐ日本人に会うのですが、旅行のためでなくて、その国の人のために一生懸命やっている方がいるということを知ったのも、お会いしたのも、JVCの方が初めてでした。今日は、そのJVCの代表で事務局長の谷山さんに来ていただいていますので、ラウフさんの話をうまく引っぱり込んでいただいて、谷山流にアレンジしてお話をしていただきたいと思います。

谷山 皆さん、こんにちは。日本国際ボランティアセンターの谷山といいます。

私たちの団体は、今、紹介にあったように、政府の団体ではなくて、市民が自分たちの目的を掲げて活動しているNGO、民間の国際協力団体です。今年で21年目に入りますが、現在は、長期的に国づくりとか地域づくり、特に農村地域での村おこしを主な活動としております。それ以外にも、職業訓練とか、あるいは都市のスラムでの生活向上とか、多様な活動をしております。

現場としましては、東南アジアのタイ、ラオス、カンボジア、ベトナム。あの地域は、今のアフガニスタンと同じように難民がたくさん流れてきて、その難民が国に帰って国づくりが始まった。その前の段階からずっと長くおつき合っています。そうした経験も踏まえて話ができればと思います。

それ以外の国ですと、アフリカでエチオピア、南アフリカ、そしていま話題になっているパレスチナ、これらの国に人を送って地域づくり、教育などを行っている。

活動の形態としては、長期的な開発協力だけではなくて、緊急事態に対して支援する緊急救援の活動もしております。今現在かかわっているのは東ティモール。もう復興の段階に入ってきていますけれども。それから北朝鮮、ユーゴ、コソボ、さらに今回のアフガニスタンです。

私の話は、なるべく私たちのような救援団体、NGOの立場からお話しさせていただきたいと思いますが、同時に、具体的な活動の話というだけではなくて、今回のアフガニスタンの戦争をどう見るかということ、これは皆さんと一緒に共有したい、一緒に考えたいと思っております。

状況は刻々と変わっています。この二、三週間で大きく状況は展開してきました。例えば12月5日にはボンでアフガン代表者会議があって、これまで難しいと思われていた各政治勢力、あるいは軍閥が共同のテーブルに着いて、とりあえず暫定行政機構が合意されて調印された。まあ大変だったみたいですがね。とりあえずみんな合意した。めでたし、めでたしだ、と。その2日後の12月7日には、最後の拠点で抵抗していたタリバンが陥落して、政権としてのタリバンは崩壊した。これも、めでたし、めでたしだ、と。つい今日は、これも二、三日前から言われていたのですが、タリバンと袂を分かって逃げていたウサマ・ビンラディンを首領とするアルカイダが、アフガニスタンの東部の山岳地帯のトラボラ地区に逃げて抵抗していたけれども、ほぼ壊滅状態だと。これも、めでたし、めでたしだ、というふうに言われています。しかし、本当に「めでたし、めでたし」だったのだろうか、というのが私たちの問いですね。

二つ問題があります。

一つは、この戦争は成功したからそれでよかったのか、正しいのか、ということです。これは立ち止まって考えなければ、これからの世界の平和といえますか秩序をつくる上で、私たちは大変な機会を失うというのが一つあります。

もう一つは、今後のことです。おっしゃったとおり、アフガニスタンの復興が、ゼロから始まるといえますけれども、ゼロというよりはマイナスかもしれない。マイナスから。だからといって、外国が寄ってたかって自分たちがやりたい活動を押しつけると、これはマイナスがさらにマイナスになる恐れがある。アフガニスタンには、彼等の伝統とか、地域のシステムとか、人のつながりとか、そういう文化があるわけです。それを無視して上から押しつけると大変なことになるということを、これからの課題として考えたいと思っています。

木村 長老会というのがあるそうじゃないですか。

谷山 ジルカというやつですね。

木村 そこを通すと話が早いとか。

谷山 そうだと思います。

ラウフ 私が後で説明します。

谷山 そうしてください。

考え方としては、そういう伝統的なものも生かしながら、しかも同時に新しい市民社会というものができていくかということだと思います。

一つは、今回の戦争は、正義だったのか、あるいは本当に必要だったのかということですが、今回ほど国際的に各国の協力を取りつけて、国際的な対テロの包囲網をつくって行われた戦争はなかったというふうに思っています。私たちは湾岸戦争からコソボ紛争とずっとかかわってきていますが、今回ほど各国が支持を表明して戦争に協力したという例はなかった。それも、アメリカが「アメリカの側につくのか、テロの側につくのか」といった最後通告を突きつけながらできてきた包囲網ですね。確かにアメリカとしては、自分たちの国といえますか国民を守る必要はあったかもしれないけれども、ただ、この戦争が国際法上に裏づけられない中でスタートせざるを得なかったために、「新しい戦争」と言ってしまうわけです。こういう「新しい戦争」という名のもとに行われたものが、アフガニスタンの人たちにどれだけ影響を与えたか、そしてどれだけ多くの人たちが死んでいるかということ、私たちは見つけなければいけない。これは本当に正義なんですか、ということです。

もう一つの問題は、人の命の重さの違いということです。

ニューヨークの貿易センタービルに対する大量殺戮事件。「テロ」という言葉は僕は非常に慎重な使い方したいと思っています。余談ですが、南アフリカでは、このニューヨークの事件を「テロ」と言っていない。「クライム（犯罪）」と言っています。デクラークとマンデラが、戦争はやめろ、これは犯罪だ、犯罪を裁け、というような言い方で共同声明を出していましたが、いずれにしても確かに大変な事件だったし、3,300人以上の人が亡くなった。私たちも、戦争に反対する運動をするときも、必ずこのことは心に留めて哀悼の念を示すということからしか出発できないと思っています。だけれども、余りに、マスメディアも含めて、アメリカという国が国を挙げて、各国もそれに同調するように「アメリカの悲劇だ」「アメリカの悲劇だ」と言うと、私たちの気持ちも非常に複雑になる。アメリカで起こったことだからこんなに悲しいのか、悲劇なのか。

しかし、アフガニスタンでは、連日のこれまで続いてきた空爆で民間人はたくさん死んでいる。この実数がかめれないのです。だから悲劇として見えてこないということもありますし、メディアが伝えない、伝えられないということもあると思いますが、私たちが知っている限りでは、カンダハル周辺では確認できただけで 200人の民間人が死んでいる。これは実数としてはもっと多いでしょう。さらに全国を実数でとらえたら、非常に多くの数の人たちが死んでいるのです。さらにトラボラ地区、まだ最終的には終わっていませんが、つい先日、4日ぐらい前かな、フランスのNGOで「国境なき医師団」(MSF) というのがありますが、そこが声明を出して私たちのほうにも送ってきましたが、彼等が確認したところによると、トラボラ地区で12月1日からこれまでの間に80人の民間人が村を爆撃されて死んでいる。実数はもっと多いでしょう。このようにして人は死んでいるのです。それを私たちは重たい悲劇として受けとめなければいけない。

さらには、この問題の背景にあると言われているパレスチナでどういうことが起こっているか。昨年のインティファダ以来、1,000人近くのパレスチナ人が死んでいる。

さらに関連すると、これもこの問題に微妙に絡まってくるのですが、イラクでの出来事。湾岸戦争以後、経済制裁、さらには飛行禁止区域をアメリカとイギリスが設定したことによって、違反した場合には空爆をしているのです。これから空爆をするということは言われていますが、今でも空爆をしているのです。7月にイラクに行ってきた、バグダットやバスラ(南のほうの町)の病院を幾つか訪ねて状況を見てきましたけれども、特に経済制裁によって医薬品、日常物資が不足している。最近は少し規制緩和されてきたのですが、現実的には薬品と機材の不足は本当に大変なものです。この10年間に100万人の子供が死んでいる。これはデータに基づいています。これは私たちは知らない。これは悲劇ではないのかということです。

今回のニューヨークでの出来事も悲劇だけれども、アフガン戦争を通して、私たちは、正義ということが余りにも非対称な、余りにも違いのある世界というものがあぶり出されてしまったのだと私はとらえています。

これを、では南の国の立場の人から、あるいはイスラムの立場の人から、攻撃されている立場の人から見たらどう見えるかということなんですね。これがおそらく彼等にとっての差別の意識、抑圧されている意識、そしてさらに、ひょっとしたらば過激派、イスラム原理主義に結びつく原因かもしれない。こういう見方をしなければいけないというのが、私の問題提起の二つ目です。

私自身は、10月の半ばから11月の初めまで、パキスタンでアフガンの難民及び国内避難民(国内にとどまっている人たち)に対する支援の調査をしてきました。私が現地に行った当時は、外国の救援団体は一人もアフガニスタン国内に入ることはできませんでした。ですから、国境に近いペシャワールとか南のほうのバルチスタンのクエッタという町で調査をするしかなかったわけです。

これらの調査を通して私が一番感じたのは、今回のアフガニスタンの人たちに起こっている危機というのは、国際的な救援活動が経験したことのないような異様な事態です。少なくとも私たちも何度も救援でいろいろなケースにかかわってきましたが、これほど難しいケースはまれだと思っています。それはなぜかということ、アフガニスタンの中であれだけ戦争が

起こり、戦争によってさらに悪化した飢餓、避難民が出ているにもかかわらず、難民がパキスタン側に出てきていない。イラン側に出てきていない。私たち国際救援団体は、直接に難民を支援するのが難しいのです。実際には難民は出てきているのですが、新しい難民をパキスタン政府が認めていないということもあって、難民の人たちは恐れていますよね。見つかったら追いつ返される。そういう恐れの中で、9月11日前に出てきた200万人の古い難民の人たちの中に隠れているという状況です。

パキスタン政府は、国境を頑なに閉ざしている。もちろんそれには理由があるのですが。当初は100万人が出てくるだろうと国連なども予想して援助計画をつくっていましたが、現実的にはそれほど出てきていない。さらに、もし100万人が出てきたらということで、国連が100ヵ所の難民キャンプを想定して計画をつくっていたのですが、パキスタン政府がなかなか難民保護に適した土地を与えないということもあって、最終的には15ヵ所しか難民キャンプのサイトは決まっています。さらにその難民キャンプの候補地は、みな国境に近いところに設定されています。基本的には難民を保護する場合には国境から離れたところにキャンプを置かなければ危険だということがあって、離れたいのですが、最終的に妥協せざるを得ない状況になっている。それらはすべて、「トライバル・エリア」といって、アフガニスタンとパキスタンの国境にある部族の自治地域にあるのです。

木村 国境の近くに難民キャンプを置くのは余りよくないというのは、それはどういうわけなんですか。

谷山 それは、両国間の戦争に巻き込まれるからです。国境の近くは、紛争にかかわる、治安の問題があるということです。

「トライバル・エリア」、最近は新聞などにも出ていますが、そこはパキスタン政府がコントロールできない特殊な地域なのです。そこに難民キャンプが設定されているということを考えても、NGOも含めて非常に救援の難しい状況があるということです。

一方で、アフガニスタン国内はもっと大変です。150万人の国内避難民が国境を越えられず、したがって国内の安全なところに避難しているわけです。さらには、650万人以上と言われているこれまで援助に頼って生きてきた人たちが、前は内戦も続いていたし、大変な歴史がある中で、援助がなければ生きられない人たちがたくさんいたわけです。国連で言うと食糧援助を行っているWFPなどがずっとこれまで支援をしていたわけですが、それが途切れてしまった。途切れてしまうと、飢えに直面しているという状況がますます厳しくなっている。

私と一緒に行ったのは井下という医者ですけれども、医者の観点から国内避難民の危機状況を彼はこう言っています。特にこれから冬になるにあたって、非常に寒いんですね、アフガニスタンは。特にハザラのほうはすごく寒いと思うんです。しかも飢え。体力がどんどん低下していく。援助が入れない状況になっていた。さらに、国内避難民は1ヵ所に集まってくるわけですから、そこで冬に向かっての感染症といいますか、特に気管支系のインフルエンザとか、そんなものもすぐに蔓延する。そうすると、150万人のうちの、いろいろな情報を集めて想定するだけでも……。もちろんその前に、予防接種が普及していないということもある。水の問題もある。大量に避難民と一緒に住むと、水系感染症も相当危険だとい

うことから、10万人以上の人間は冬を越せないというふうに警告を発しています。

そんな中で私たちが何ができるかということを考えたときに、難民もなかなか出てこれない。出てきたとしても、支援をするのは非常に難しい状況にある。だけど今はもっと国内が大変だ。それは1ヵ月前、2ヵ月前の状況であるというだけではなくて、今でも状況は変わっていないと私は思っています。国連など入ることができましたけれども、とりあえず都市には入れるのですね。カブール、ヘラート、マザリシャリフ。北部の飢餓ベルト地帯に対しても、ウズベキスタンからの救援が、橋がオープンしたから入れるようになった。北部の飢餓ベルト地帯には必要量が入ったけれども、そこから具体的に地域まで届けるのは別の問題です。これからが大変。それ以外にもたくさんの人たちが必要としている地域があるけれども、治安が悪い。私たちがパキスタンから国境を越えて、私の次の陣が入ろうとしたのですが、あの辺で外国人新聞記者が4人殺されるとか、急遽セキュリティ・ミーティングを開いて、現地のアフガニスタンのNGOと協議して、何とか大丈夫だろうとした途端に、今度はアフガニスタンのお医者さんが私たちの活動場所で殺されるということがあったり、非常に危険なので、今、状況を見ている状況です。

結論として、いま本当に確実に援助を届けられるのは、私たちが当時入れなくても、アフガニスタンのNGOは今でも現地で活動していた。そことタイアップするのが一番効果的だ。しかも彼等はその地域で地域社会との結びつきが非常に強いという中で、私たちが我も我もと出て行って直接やるのではなくて、アフガニスタンのNGOとタイアップしてやろうということに決めたわけです。

木村 アフガニスタンのNGOというのは、どんなところがあるのですか。

谷山 500ぐらいあると言われていています。「アフガンNGOコーディネーション・ビューロー」というネットワーク組織に登録しているだけでも500ですが、実数はひよっとしたらそんなにもないかもしれないですね。

木村 それをまとめているところがあるわけですね。

谷山 管理しているわけではなくて、情報交換とかネットワークですから、一応登録しているというだけだと思います。

木村 NGO同士の間ではある程度信頼関係ができているから、例えば谷山さんのJV Cを通してすれば向こうのNGOの中で信頼関係が結べるところに到達すると、こういうことですね。

谷山 そうです。直接には一番信頼関係のあるところを選んで、「OMARインターナショナル」というNGOとタイアップしたことになるのですが、ここは地雷除去を10年以上やっていたところで、地雷の関係から、その被害者に対する医療活動がかなり充実してきている。あとはリハビリテーションですね。被害者の収入向上とか。しかも、いま木村さんがおっしゃったように、地雷にかかわっているアフガニスタンのNGOだけで50団体あって、そこがまた地雷の活動のネットワークをつくっている。これは「ACBL(地雷廃絶アフガン・キャンペーン)」というのですが、日本には、日本のそういうのがあります。「地雷廃絶日本キャンペーン」というのがありますが、そことアフガン・キャンペーンは仲がいいという今までの歴史的なこともあって、コミュニケーションしやすかったということもあります。

この「OMAR」というのは、「アフガン・キャンペーン」の中心NGOです。ちなみに「日

本キャンペーン」は事務局がJVCの中にあるので、かなり情報は入っているということから「OMAR」に出会ったということもあります。

とにかくアフガニスタンのNGOと協力するのが一番いいだろうと。本来は外から入れようとしたんだけど、非常に危険だということもあって、彼等を通して食糧を国内で調達して、今、1,800家族、1万8,000人に対して小麦粉、食料油、そして「OMAR」がやっている巡回医療に医薬品の提供をして地域を回っていく。特に国内避難民が集まっている地域を回るといふ活動をしています。そして、1万枚の毛布を今イラン経由で入れるということになっています。

最後に、詳しいことを話したいのですが、時間もありますので。結局、今回の国内避難民の危機的な状況というのは、確かに背景があります。干ばつの問題とか、タリバンの行政の問題とか、いろいろあります。だけど直接的に危機的な状況を生んだのは、アメリカ、イギリスの空爆です。空爆が続いている間に、世界じゅうで「難民を支援しましょう」という声が高まっています。そのときに、私たちはいつも矛盾に陥るわけです。一方で危機を生んでおいて、一方で「助けましょう」と言っているわけです。「難民が出てきたら助けましょう」と待っているわけでしょう。これを「右手でたたいて左手で助ける悪魔的な構造」と呼んでいるのです。僕たちも常にそういう矛盾の中に置かれる。そして苦しむのですね。とにかく支援できることは支援する。同時に、戦争をやめさせないとだめだと。私たちは、救援だけでなく、国内で声明を出し、署名活動をし、さまざまな市民集会に出て訴え続けてきました。ただ、それが影響力があるかどうかというと、残念ながらなかなかそれが影響力を持ち得ない。もっとやり方はあると思うし、考えたいと思いますが。ただ、こうした矛盾をそのまま容認するのではなくて、少なくとも倫理的に矛盾を乗り越えるための活動のスタンスを私たちは持ちたいと思って、これからも声を出し続けていきたいと思っています。

以上です。

木村 谷山さん、いろいろテレビで見ていると、確かに、空爆しているところも映るのですが、タリバンの支配に対してかなり辛い立場に立っていた人たちが今度の戦争によって解放された、そういうふうな映像がたくさん映るんですね。今まで風を上げられなかったのが、子供たちが風を上げているとか、ひげを剃っちゃいけなかった人が喜んでひげを剃っているとか、女性の被るやつ、ブルカをぬいでいる女性がいたりとか、そういう一種解放感みたいなものがメディアの中には流れているのですが、これはどんなふうに見たらいいですか。

谷山 これは、本当にこれからお話ししていきたいと思うのですね。というのは、僕は日本人だから、アフガニスタンの人自身がそれを直接話すのが一番いいんだけど。ただ一つ言えることは、僕も現地で、パキスタンにはたくさんアフガニスタン人が行ったり来たりしているので、いろいろな人たちと話した。あるいはパレスチナの人たちともたくさん話した。パシュトゥン系の人たちともたくさん話した。一人、絨毯商人をやっていた人と長く話したんですけど、親戚はアフガンの中にいる、自分も年に4回行ったり来たりしていると。普通の人ですね。彼が言っていたのは、西側のメディアが伝えるタリバンに対する情報は90%は嘘だ、と。確かにそういうふう言っている人はいる、けども西側の人たちが

気に入りそうなことを言う都市の人にマイクを向けるからみんなそうだと思ってしまう、でも農村地域では、タリバンもいろいろ問題はあるけれども、少なくともイスラムの教えに則った政治をしようとしていた、少なくとも貧しい人たちには公平だ、と。ただ、ハザラの人たちに対して公平かどうか、僕はすごく疑問がありますが、そういう声もあるということです。

もう一つは、パキスタンの多くの人たちが、タリバンに対して私たちが信じる以上にどっか共感を持っているというのは、イスラムの立場の主張だと思います。特に貧しい人たち。ただ、それがタリバンを支持するかどうか別として、アメリカに対する反発がパキスタンでも非常に強くて、それが結局カシミールの問題と結びついているのですね。カシミールでも、結局国際社会は解決しなかった、約束したにもかかわらず自由選挙で選ばせるということをしていない、まだインドの支配にある、と。そこから、パレスチナでも全く同じだというふうに、「イスラムの人たちが結局差別されている」という心の叫びみたいなものがパキスタンでは強かったということだけ補足しておきます。

木村 あれが90%嘘だったというのは、ショックだな。

ラウフさんに、ラウフさんの立場から見た日本のメディア、あるいはCNNとか世界のメディアをどういうふうにご覧になっているか。

ラウフ 例えばアフガニスタンの中に、女性の問題、ブルカとかいろいろ大きな問題がありますが、タリバンのやり方とかウサマ・ビンラディンのやり方について一度本当のことを勉強すれば……。ウサマ・ビンラディンはなぜアフガニスタンに入れましたか。タリバンがなぜアフガニスタンの中にできたかということですね。もしタリバンがアフガニスタンの国民で選んだものだったら、倒れなかったと思います。例えば、風で来たものは風で出てくるじゃないですか。タリバンも全くそういうものです。ウサマ・ビンラディンも全く同じことです。

ウサマ・ビンラディンとかタリバンは、わざわざイスラムを壊すためにつくったものだったから、彼等はアフガニスタンの中に入ってきたら、自分の好きなようにイスラムの名前で命令を出したり、いろいろなことをやっていたんです。女性は、アフガニスタンの中でじゃなくて、イスラムの命令の中で一番自由なものです。大切にすることはレディースです。女です。女はちゃんと勉強しなければ、言葉がわからなければ、大学へ行かなければ、学校へ行かなければ、どういうお母さんになるでしょう。勉強した女と勉強していない女は、違いが多いんですね。すばらしい女は、すばらしいことを勉強すれば、必ずいい子供をつくって、このすばらしい子供が大きくなったら社会のためにとっても便利なものですね。だけど勉強しない女だったら、いい子供に育つことはできないですね。この辺は私たちは非常にかわいそうだと思いますが、これはイスラムの命令ではない。ブルカはイスラムのことではないです。必ずブルカをしなければならない、そういうことはないです。まずは、必ず顔は見せなければならない。ただ、女性のため、男のため、両方のためにリミットがあります。これ以上行けば落ちる、この辺のリミットができているから、リミットを守ればイスラムの中で女は大統領にもなれますし、総理大臣にもなれますし、どんなポストももらうこともできますよ。例えばタリバンのやり方について勉強すれば、彼等のやり方は、タリバンのやり方です。アラビアのやり方です。ウサマ・ビンラディンのやり方です。イスラムは一切関係ないです。

ヨーロッパのメディアは、なぜこのタリバンがパキスタンの中でできてアフガニスタンに入ったかということは、一切説明しません。ウサマ・ビンラディンがなぜアフガニスタンに行かなければならないかということは、一切説明しません。なぜですか。タリバンはアメリカがつくったものです。アメリカはこういうゴミをつくって、アフガニスタンの中へ入れたんです。これは最低だと思います、アフガニスタン人として。私たちの国を壊すために、イスラムを壊すために、こういうことをやったんです。そしてその後は、いろいろプロパガンダもして、イスラムはそうだ、アフガニスタン人がそうですと。

きのうも見たんですけれども、最低な言葉を例えばアフガニスタンのレディースについて書いてあったんです。非常に寂しいですよ、こういうことは。わざわざ私のためにポストに来たよ。なぜですかということ。

ですから、私は皆さんにお願いするのは、ちゃんとイスラムのことを勉強してください。それから判断すれば一番正しいと思います。アフガニスタンについて勉強をしてから判断してください。アフガニスタンの中に入ってきて、例えば1週間、10日間、1年間回ってきて、そしてアフガニスタンの周りやイスラムの本を書くんですよ。アフガニスタンのことがよくわからないですよ。勝手に本を書くんですよ。これは私たちは非常に寂しいですよ。ちゃんと調べないままで、勝手にいろいろなことを言うんですからね。

ウサマ・ビンラディンとかタリバンは、もともとアメリカのものですから。最初は彼等がつくったんです。イスラムを壊すために、アフガニスタンを壊すために。アメリカは、もともとアフガニスタンから何が欲しいんですか。例えばアフガニスタンにはガスが残っていません。石油が残っています。隣にトルクメニスタンがあるから、アフガニスタンから出なければ、トルクメニスタンのガスも取らなければならないからね。この辺から、まずタリバンをつくって、できるだけ泥棒をするように、アフガニスタンの石油とかガスとか、あとトルクメニスタンからいろいろ買って持っていかなければならないから。この辺、私たちアフガニスタン人として必ずわかりますよ。わからないということはないです。残念なんですけれども、アフガニスタン人が、あんなに石油、あんなにガスがありますけれども、国の中で私たちはガスを使うことはできないのです。カブール、首都の中で、まだガスはないんですよ。マザリシャリフ、一番大切なところでまだガスはないです。ヘラートはガスがないです。ハザラジャードは道もないです。この辺が本当のことです。アメリカは石油はありませんか。ヨーロッパは石油はありませんか。特にイギリス。

この間も、総理大臣の小泉さんが、「アフガニスタンを壊してもいいです。後で直しますから」。自分の耳で聞いたんですよ、テレビで。「壊してもいいです。後で直しますから」。これは総理大臣として正しい話であるでしょうか。壊してあと直すのは、一緒に人が亡くなるじゃないですか。この話を総理大臣から聞いたと思うと、非常に寂しいと思います、アフガニスタン人として。

私のお願いは、いっぱいありますけれども、例えば手伝いという話、あれを直したいという話、目的を私たちに話してほしい。例えば何のために直したい、何のために壊したい。これは非常に大切な話です。アフガニスタンは非常にかわいそうです。たまにソ連で、たまにアメリカで壊してしまっているのですね。たまにヨーロッパ、たまにあちこち。この辺、私たちアフガニスタン人同士、自分の国、自分の将来、自分の政府を選ぶこともできません。

例えばボンで選んで決まった政府は、アフガニスタン人が選んだものじゃないですね。だけど今のところは必要ですから、どうしても私たちは我慢しなければならないから認められます。PKO、国際軍は、アフガニスタンの治安を守るために来るから、私たちは認められます。もちろん必要ですから。国の中で人々のパワーがないから、自分を守ることができないから、どうしても治安が大切ですから、皆さんに助けていただければありがたいです。ただ、目的を決めていただければありがたいです。

アメリカは、ウサマ・ビンラディンのテロがあって、テロを壊すためにアフガニスタンの中に入らなければならないと。このテロは、誰の責任でしょうか。これは、皆さん知っていますよね。ウサマ・ビンラディンはどこから、いつアフガニスタンに入りましたか。タリバンがあんなにお金を持っているのは、どこから出てきているんですか。麻薬をつくって、ヘロインをつくって、何でもつくって、ヨーロッパに持っていっても、アメリカに持っていっても、誰も文句を言わなかったんです。なぜですか、今まで。

タリバンのせいでアフガニスタン人、特にハズラ人が非常にいっぱい犠牲になりましたけれども、人間としてアメリカはどこだった。人間としてヨーロッパはどこだったんです。日本はそのときはどこだった。1日、マザリシャリフだけで1万4,000人ぐらい亡くなりました。特別の命令を出して、ハズラ人を、シーア派を、首を狩ってきたんだよ。バーミヤンもそうだし。カブールの中で、人々の財産、生活、100%なくなっているんだけれども、そのときは誰も文句を言わなかったんです。突然、例えばニューヨークにああいう問題が出てきて、アフガニスタンのことをみんな思い出したんです。

この辺が、先生、本当のことで、アフガニスタン人として、泣いても泣いても泣いても止まらないんですよ。

木村 この点については、谷山さんのほうから、実際に谷山さんが感じられた目で後で話していただきたいと思います。

難民の話が先ほどから出ています。難民というのは、現地で難民をどう支援していくかという問題だけではなくて、私たちの国が難民をどういうふうに分けて受け入れているかという日本の責任、私たちがかかわる責任、これも含む問題になります。苑原先生から皆さんにレジュメが渡っているかと思いますが、これに基づいて約30分お話をさせていただきます。その後、また皆さんの質問なども受けながら、議論をしていきたいと思っています。

苑原 すごくホットなところでこの問題を話すのは、非常に気が引けます。というのは、聞いていても頭がこんがらがってきてしまって、何のことを話しているのかわからないという、そういう恐れがあるからです。私は、法学部の教員として、少なくともこのアフガニスタンにかかわる問題の中で、日本が足元において日本社会でどのようにかかわるべきかということをお伝えする際に、「難民」という言葉をしっかり理解していただかなければいけないなと思ひまして、タイトルは「アフガン『難民』とわたしたち」としました。

先ほど谷山さんから、「国内避難民」とか「難民」と、そういういろいろな表現がありましたが、それらの言葉の違いも私は法律の立場から説明したいと思っています。

まず、レジュメの5頁（本書37頁）を開いていただきましょうか。毎日新聞の朝刊、12月14日付のものでございます。印刷の都合上、三つの新聞の記事を一緒にしてしまい、見にくくて申しわけありませんが、その右上の「母国のNGOに5人が窮状訴え」という見出しの

記事です。これは、先週、アフガニスタンの復興のために現地のNGOがこれからどうするかということ、東京で国際会議を開いたわけです。その折に、日本において難民として認められなかったアフガニスタンからの人々がアピールをした、という内容の記事でございませぬ。日本のNGOにせよ、日本政府にせよ、国際機関、国連等にせよ、アフガニスタンの復興に何らかの支援の手を差し伸べようとしているときに、我々の足元にある人道問題といましようか、人権の問題についてもちよっと考えてほしいというのが、私の今回の発表の一つです。

そこで、「難民」という言葉を最初に定義しなければいけません。法律家というのはすべからくそうだと思いますが、自分の話すことについて、まず定義をすることで一安心するという悪いくせがございませぬ。それが弁護士さんの役割にもなるわけでしょうけれども。「難民」というのは、その資料集の1頁（本書33頁）に、すべてではないのですが、一部分をコピーした条約があります。国際的な取り決めです。これは1951年に国連が採択した「難民の地位に関する条約」というものです。日本も1981年に加入しています。その1条に、この条約でいう「難民とは何か」ということをズラズラと書いてあります。これを読んで一発でわかったら法学部を卒業してよろしいというぐらいにわかりにくい定義になっていますが、私なりに簡単に言いますと、人種とか、信じている宗教とか、属している民族とか、自分が考えている政治的な意見が違っているということ、それだけを理由にして自分の住んでいる国から追い払われてしまつて、もしも帰つてしまつると、そこで命とかその他危険があつて、いわゆる迫害を受ける恐れがあるので本国へ帰れない人たちを指すのです。昔は「政治亡命者」という言い方もしていましたが、この条約にならつて今は一般的には「難民」といいます。

この条約に基づいて、条約に入っている国が、日本もそうですけれども、受け入れを認めれば、そういう人たちは外国人であっても条約上の難民という形で特別な法的な地位が与えられます。したがつて、条約に定められたいろいろな権利が認められるわけです。

ところで、その条約上誰が難民かということの定義は書いてあるとしても、その条約に入っている国に外国からやつてきた人たちが難民であるかどうかを認定する、決める、このことについての手続は条約には書いていないのです。したがつて、これは、各国が自分たちの責任で、国の法律の中で決めるということになっています。一たん国の法律上で難民として受け入れれば、その人たちは少なくとも本国へ帰ると迫害を受けて危険ですから、そういう本国への追放とか強制送還はしてはいけないうこととも各国に義務づけられているのです。それは33条に書いてあります。

こういう狭い意味での、これから話をしていく日本国内で問題が出てくる条約上の難民の話になりますが、国連が発足当時、第二次大戦後の戦災から逃げていく大量の難民、それから東西冷戦のもとで体制を嫌つて国境を越える人たちも出てくるわけです。そうすると、個人個人のそういう迫害の問題から難民を救援しようという人道的な流れが出てきたのですが、しかし大量に発生している難民の人たちを国連としても一括して扱わなければいけないうことと、国連難民高等弁事官という人を任命する、そういう内容の決議が国連総会によつて採択されたのです。そして、UNHCR（国連難民高等弁務官）というのが任命されることとなります。つい昨年まで緒方貞子さんがこの職に就いていたことは、よく知られていることですね。

この高等弁務官は、先ほど述べました条約に基づく難民の国際的な保護だけではなく、先ほどいろいろな地域の紛争の名前が出てきましたが、コソボとかユーゴとか東ティモールとか、そういう世界じゅうに発生する戦争ないしは内戦、大規模な人権侵害等々で発生する、そして国境を越えた人たちを何とか救済しようということまでできていますので、この条約よりはやや広いカバーをした難民支援をしています。特に特色あるのは、国内避難民というのが出てくるのです。東ティモールとかロシア国内でのチェチェン共和国の紛争で出てきたのですが、紛争地からは逃げる、しかし国境は物理的に越えられないし、越えていない、とどまっている、しかし何らかの国際的な救援を必要としている、そういう人を一括して「国内避難民」と言います。これは難民というよりはやや広い概念だと考えてください。

さらに、難民であっても、一たん外国へ逃れても、本国が和平があったりして平和になった、そうすると故郷へ帰りたくなるのは人間の人情です。そうしたときに自分の意志で自発的に本国へ帰った人たちもいます。こういう自国への帰還民という人たちもいるのです。ただしそれが、例えば旧ユーゴの紛争でもそうなのですが、民族間の対立とか隣の人たちとの間のいざこざが原因だったりすると、なかなか社会的に復帰できないということがあります。そこで、こういう帰還民の人たちに対してもUNHCRは支援しているのです。

以上、「難民」「国内避難民」という言葉の違いを説明しました。

次に、難民認定の手続ですが、資料（2）（本書34頁）、フローチャートになっています。これは、日本が1981年に先ほどの条約に入りましたから、日本も国内法を整備しました。82年1月1日から施行された「出入国管理及び難民認定法」という法律に基づきます。これによって日本が入っている条約の難民認定を日本が任されましたから、日本にやってきた外国の方は、この認定手続に従い申請を地方の入国管理に当たる役所へ出す。その役所には難民調査官という人がいて、その申請の書式を受けてインタビュー、面接をして、いろいろ調査して、それを本省、東京にある法務省の入国管理局、トップが法務大臣ですが、これに上げるわけです。法務大臣は、いろいろな事情を考慮して、この難民申請者が条約上の難民に当てはまるかどうかを判断するわけです。で、認定する、または不認定ということを行います。

認定すれば、難民として認定されたということの証明書を交付して、条約上の権利が保障されるわけです。

ところが、不認定ということもあるのです。残念ながら、日本の場合は不認定のほうが多数です。不認定であった場合は、法務大臣から申請者本人に対して理由が通知されて、もし本人が不服があれば異議を申し立てることができるという法律には書いてあります。その異議が、理由があれば敗者復活がなされますが、理由がないと不認定のままになります。本人が日本の中に滞在することができるかどうかというのは、出入国管理という法律の別の側面にかかわってきて、資格があれば滞在できますが、もしそれが否定されると、場合によっては国外へ追放されるということが出てきます。これが現実になったのが、これから述べます日本の事件です。

3の「アフガン『難民』申請者に関する最近の事件」に入りたいと思います。

この事件のあらましを、資料（3）（4）（5）、3頁から5頁（本書35～37頁）の新聞記事を使って説明したいと思います。

ごく簡単に言いますと、ラウフさんもある意味で、ソ連のアフガン侵攻並びにそれによる

政権の交代、そして少数者に対する迫害ということから日本へ逃げざるを得なかったということですから、難民の一種かもしれませんが、この9月11日以降にアフガン紛争から逃れて来日したアフガニスタン人がいるわけです。その人たちが難民申請を行ったところ、9名が摘発されました。東京の入国管理局によって入国管理にかかわる施設に強制収容されるという事件が発生したというのが、3ページの記事に書いてあります。東京新聞の記事です。これは、先ほど言いましたように、難民申請が認められないと、最悪の場合、迫害を受ける本国へ強制送還される可能性もありますので、関東圏内の弁護士さんたちが弁護団を結成しまして、この人たちの身柄を強制収容ということですから拘束していますので、強制収容令書を法務省が出したのはおかしい、そういう処分をとりあえず効力を執行停止して、場合によっては取り消して身柄を自由にさせたいということで裁判所へ訴え出たというのが、この事件のあらましです。

11月5日と6日に、この事件を付託された東京地方裁判所は、4名と5名に分けて、民事二部と民事三部でそれぞれ審議しまして、おもしろいことに結論が違っていたのです。9名のうち4人については、執行停止の弁護団の請求を却下しました。「認めない」ということです。他方5人については、逆に執行停止の請求を認めて、「執行はしない」ということを決定したのです。この決定の問題については、後で少し詳しく説明したいと思います。

現状まで説明しますと、11月10日に、身柄を収容されるという執行処分を停止するよう請求した、それが認められた5人の人たちは身柄が解放されましたが、そのまま身柄を拘束された残りの人たちを含めて全員の難民申請が却下されたのです。20日には法務大臣が9人の難民不認定処分をしたというのが、資料(4)にある読売、日経の記事に書いてあるところです。

こういう地方裁判所の決定に不満な人たちは、日本の場合は三審制といって高等裁判所、最高裁というのがありますから、上のほうに即時抗告という申し出をしたのですが、残念ながら東京高等裁判所は11月26日に収容され続けている人たち4人について訴えを棄却、すなわち「認めず」ということになりました。

そうするうちに、この4人の人たちについてですが、場所を東京の施設ではなくて牛久という茨城県にある入国管理施設、これは入国管理にかかわる法律の制度では外国人を日本の国外へ追放するための手続をする際に移す施設ですが、そっこのほうに移動させられたのです。ということは、国外追放の可能性が非常に高くなっている。資料(5)、毎日新聞の夕刊と朝日新聞の朝刊の記事ということになります。これはひょっとして強制送還されアフガニスタン本国へ送還されると命の危険も考えられるというので、いま非常に大事な局面です。

そこで、私の今回の発表では、東京地方裁判所の決定が二つに分かれてしまったことについて少し皆さんと考えてみようということです。

この9人は、ほとんど背景、事情は同じです。本国を出ざるを得なかったこと、日本へやってきたいきさつ、家族の状況とか。で、判断が二つに分かれてしまったわけです。

6頁(本書38頁)に、二つの事件の地方裁判所の決定の結論部分だけコピーしました。下のほうの民事二部のほうを見てください。これは執行停止処分を認めなかったほうですが、こういうふうに言っています。仮にこの申し立てをした人たちが条約の上で難民であったとしても、この人を日本の法律に従って身柄を拘束することが認められるのだ。

条約に31条2項という条文があります。「避難国に不法にいる難民」という見出しで書かれた条文です。もちろん日本が入っていれば日本に当てはまるわけです。締約国は、その生命又は自由が第1条の意味において脅威にさらされていた領域から直接来た難民であって許可なくその国の領域に入国し又は許可なく領域内にいる者について、不法入国等々を理由として刑罰を科してはならない。ただし、当該難民が遅滞なく出入国管理当局に出頭し、自分はこうこうこういう理由だから日本に不法に入国せざるを得なかったと、ちゃんとした理由を示すことを条件にする。強制収容というのは、身柄を拘束するという人権を制限することですから、罰則ですよ。そういう不法入国という形式的な法律違反で罰則を科してはいけないということですから、これは条文に照らすとおかしいと弁護士さんたちは言ったのです。

裁判所の先ほどの決定にもう一回戻りますが、民事二部のほうは、条約に書いてあっても違反はしないという解釈をしたのです。

これに対して民事三部のほうは、全く違います。ここで言う相手方は入管当局ですが、それが強制収容したという行動に出たことは、法律の運用にあたって、そのさらに上にある難民条約という難民の人たちの権利を守る条約を無視している、だからこれは国際秩序に反す、というふうにまで述べたのです。木村弁護士がいらっしゃるのでよくわかっていらっしゃると思いますが、日本の裁判官でこういうふうに直接的に政府の政策に対してズバツと言うというのはなかなか多くはないはずですが、こういう判断をしたということです。

先ほど、UNHCRという国連の機関が、難民問題、特に国際的な保護、条約の上での難民の保護をするためにつくられたということを述べましたが、この当のUNHCRでさえ、1986年にその締約国がこの条約を運用する際に守っていくべきルール、ガイドライン(指針)をつくったのです。その指針の中では、難民を申請している途中の人に対して身柄を収容することは極力避けなければいけない、原則としては禁止されるべきである、ということまで言っています。(ほかに難民申請者の収容に関する適用可能な基準と規範についてのUNHCRガイドライン(修正版)、1999年などがある)それにもかかわらず日本の裁判所は、こういういろいろな国際的なルールと日本の国内法を厳正に法と正義に基づいて解釈しなければいけない人たちなのですが、片方では「難民であっても強制収容が認められていい場合もある」と言う人も出てくるわけです。これはどういうことを意味するのでしょうか。これは私の意見ですが、どう考えても裁判官の一部は、日本が今置かれている立場、日本がちゃんと守ると約束した種々の人権の約束(人権条約)の内容をよく知らない方がいる。または、知っていても、それを救済を求める人たちのためではなく行政のために解釈するというような人たちが多いのではないかという気がします。そういう意味で司法部に対してちょっと注文したかったなということです。

もう一つ、この申請者の人たちは残念ながら申請が認められなかったわけですが、資料の5頁の毎日新聞の夕刊(11月27日付)、これは極めて異例なのですが、法務大臣自らが、記者会見という公の場で、今回の9人の難民申請を認めなかったことの原因を述べたのです。たいていは、難民申請に対する不認定処分は、理由をつけた紙をポンと送って「はい、終わり」というのが多いのですが、大々的にメディアの前でこういうことを言うというのは、私の憶測で言いますが、何らかのアフガン紛争にかかわる政治的な考慮でやったのかなと。これは推測ですから、根拠はありません。

このメディアに書かれている記事を私なりに解釈しますと、まず「迫害の恐れを裏づける証拠がない」と言っていますが、先ほどラウフさんからもお話があったように、この9人はパシュトゥン人じゃなくてハザラと、1人はタジク人でしたか、少数派の人たちです。何年にもわたって迫害の現場にいたということは客観的にもわかるはずなのですが、「迫害の恐れはなし」と考えているようです。

もう一つの理由として法務大臣が言ったのは、もっぱら就労目的で不法滞在している、働くことが目的だから日本に難民に来たのではないと言うけれども、よく考えてほしいのですが、難民申請者も生活者です。日本社会で生きていかなければいけません。難民の認定プロセスは、結構時間がかかる場合もあります。その期間、日本の中で生活をしていかなければいけません。日本の場合、若干生活支援の制度があることはあるのです、公の制度が。しかしそれは、難民申請者に対してあらかじめよく周知（詳しく情報提供）されているとは言い難いわけです。現にこの9人の中の1人は、あとでやっとうるという日本の制度があることがわかったと言っていました。当初は申請の時点ではわからなかったと言っていました。そうすると、もっぱら就労目的云々と言うけれども、難民の定義に後になって該当するかもしれない人間に対して「働くことはいけない」と言うのはフェアかどうかということを考えてください。

私は今回の裁判所の態度とか法務大臣（入管当局のトップの人）の考え方を見ますと、どう考えても人権感覚がどこかずれていると思わざるを得ません。それはアフガニスタンの人たちばかりでなく、ほかの国からやってくる難民に対しても中央にして見られることです。そこで、今回アフガン難民を取り上げましたが、これから先、日本社会と一緒に住んでいく外国の人たちを我々社会がどう受け入れるかということの、いわばリトマス試験紙になったように私は考えざるを得ませんので、皆さんもよく考えてください。

というのが私の報告のまとめです。どうもありがとうございました。

木村 3人の方から基本的なご報告をいただきました。

今のアフガニスタン人の9人が、法務大臣がわざわざ記者会見して、難民ではなく就労目的だと言った。これは新聞に弁護側の言い分と法務省側の言い分というのが表で出ていて、このアフガニスタンの人たちは今まで何度か日本に来ていて日本で就労している、行ったり来たりして、また来ただけではないのか、というような法務省側の見解が載っていたのですが、これは実際にはどうなのでしょう。

苑原 救援弁護士がおっしゃった新聞の記事だと思いますが、違うんだということだと思います。9人のうちどの方についてかわかませんが、M. Y. さん（プライバシー保護のためイニシアルとした）のことですか。

木村 だったかもしれませんが。ちょっと私も名前は覚えていません。

フロアD いま木村先生がおっしゃったことですが、読売新聞に、どなたかが何回も来て自動車販売をしていて、貯金が1億あると。

木村 1億円と書いてあるんだけど、本当は3,000円しかないんだというような記事もあったけど。

苑原 そういう記事はあります。毎日新聞の12月6日付、特集ワイド欄というのがあります。その中で、本人が以前勤めた会社云々が買い付け代金として送金したものであって、

本人自身の財産ではないとか、そういう本人の言い分も書いてあります。

それから、アフガンに何度か行ったことがあるとヤフヤさんは言われたけれども、そんな供述をした覚えはないと本人は否定しています。

ちなみにこの記事では記者が、これは入管当局の調査官ではなくて、第三者、UNHCRの元法務官という難民認定手続に詳しい実務家の方に、このケースは難民として認めるかどうか依頼したようです。そして「認められる」と書いてあります。

木村 アフガニスタンの問題については、メディアの情報のどこをどう信用するかということがなかなか難しい思いが僕もしました。そのことについては、谷山さんも先ほどの発言の中で触れておられましたし、ラウフさんも話しておられました。タリバンのあり方については、少数民族の側からの発言と、女性団体—RAWAですか、アフガニスタンの中で一つの秘密結社みたいな形で女性の方たちが活動しておられて、女には教育してはならないと言われているんだけど、実際には地下で教えているというような報道がなされたこともあります。そういう少数民族とか女性に対する労働の問題、教育の問題、そういう点でかなりタリバン支配の時代について批判が強いわけです。その点が一つには今回の戦争を結果的に合理化するような論評ともつながってきていると思いますが、その点は谷山さんはどんなふうに考えていらっしゃるでしょうか。

谷山 本当は問題をもっと整理しないと、非常に一方的な発言になってしまって、誤解を招く恐れがあると思うのですが。

イスラムの問題と、アフガニスタンであれ、カンボジアであれ、パキスタンであれ、あるいはパレスチナであれ、その地域地域の文化の問題等それぞれあると思うのです。きっとイスラムそのものは僕ももっともっと勉強しなければならないけど、おっしゃったように、そういう女性を差別するとか、ブルカを被らなければいけないとか、そういう話は全然ないと思います、僕が知る限りは。けども、よくわからないのは、ブルカを被っているから、じゃあブルカをぬげということアメリカ人に言われることがどういうことなのかということなんですね。タリバンがアメリカの敵になったときに、急激にそういう話になってきた。必ずしもアフガニスタンだけじゃないですよ、ブルカを被っているのは、パキスタンの人たちでも、保守的なイスラム教徒の人たちは被っているでしょう。それはそれでいろいろな問題があって、内側から変わっていく問題だし、大事なものは彼等が大事だとして保存しなければならない問題であって、外側から言われることじゃない。それはブルカだから僕が言うとおかしいけれども、日本の伝統だって全くそうだと思っているんです。そういう考え方を取りたいというのが一つあります。

メディアに関しては、今回も相当報道規制があったと感じています。「戦争のときには報道規制があるのは当たり前だ」という態度で報道に接しないと実情が見えてこないのだけれども、イラクのときもそうだし、コソボのときもそうですけれども、嘘をつくというのではなくて、一面でとらえるから、それ以外の報道がなかなかなされない。私が一番感じるのは、戦争による被害の実情ですね。これからいろいろなことが暴かれていくと思いますが、私たちが実際にアフガンの中で空爆によって被害を受けた人たちの生々しい場面に接する機会はほとんどありません。

ちょっと昔の話になりますが、イラクで空爆されましたね。イラクは進攻したこと自体は

非常に問題がある。だけど、その背景にはいろいろな政治的な思惑がある。石油の思惑がある。アフガンでも天然ガスの思惑があると同じように、アメリカは絶対にあの地域に強い政権を持ちたくなかったということで、イランとイラクを戦わせたことに始まって、戦争をけしかけるような工作がされています。それはともあれ、侵攻したから攻撃したわけです。そのときには、ピンポイントだ、民間の施設に被害がない、ということがさんざん言われていたわけです。私たちはテレビゲームを見ているような感じで「ああ、すごいなあ」と見て、それで終わりなんです。でもそこには死んでいる人たちがたくさんいるという感覚が麻痺してしまうわけです。CNNの記者が、空爆された病院とアメリカセンター、両方を爆撃された直後に取材しています。アメリカの避難シェルターでは500人近くの間人が殺されている。それを報道した。病院も報道しようとしたときに、その後クビになっていますよね。そういうことが起こることがある。

メディアもいろいろ努力しながらやっていくということだと思うけど、市民のメディアとか、例えばパキスタンのメディアはどうか、ほかの立場の人たちはどう言っているか、そういう多様な情報源を持たないと、特にこういう紛争の問題は非常に偏るということを感じました。

木村　それでは、会場からどうぞ。

フロアE　私は、1968年に世界20カ国を3年間かけて回ったことがあるんです。そのとき、ラウフさんは14歳だったと思います。一番驚いたのは、イラクのバグダットに行ったときに、飛行機が着きましたら、なんと飛行場の建物の屋根が茅葺きだったんです。2階建てくらいで。ホテルに泊まったら、ホテルの前の道は泥道で、あちこち穴があいて水が溜っているんですね。あとでわかったのですが、なんとそれは東京の銀座通りみたいなところだったんです。なんで中近東はあんなに貧しいのかということで、驚きました。

パキスタンのカラチに行きましたら、あそこの目抜き通りで人が物を売っているんですが、タバコは1本ずつバラで売っている。櫛を3本持って売って歩いている人がいました。これは日本の戦後なんてものじゃない。大変大変貧しい地域でした。なんでああいうことがある地域があったのかということで、びっくりしたんです。

その後、湾岸戦争のときにバグダットの映像を見ましたら、もう高いビルができていた。私が行った後でオイルショックがあって、何だかんだ日本のものが安くなりました。僕はそのあと土地を買ったのですが、ものが安くなって、150坪で100万円まけてくれました。そういう時期だったんです。驚いたのは、映像で、何もなかったバグダットに高いビルがいっぱいできている。金が入ったんですよ、アラブに。全部アメリカ、イギリスに吸い上げられていたんです。そうでしょう。だからあの地域は、あんな貧しい中で、タバコも1本ずつ売られるようなことを目抜き通りやっていた。

さっきまでここにアメリカ人が1人いましたので、ぜひ彼女にもこのことを話して聞きたいと思ったら、帰っていきましたね。法律問題になって難しくなったものですから、わからなかったんでしょうけれども。これをぜひアメリカの人に聞いてもらって、どういう反応をするか聞きたいと思っていたんですが。

戦争があろうとなかろうと、あの地域はどうしてあんなに貧しいんですか。これは、アラブの人自体にも考えてもらって。子供たちの教育とかそういうこと。アフガニスタンはああ

いう山岳地でどうしようもないかもしれませんが、低い海岸の地域はもっともっと発展していいはずだと思います。どういうふうに使われますか。

木村 非常に根本的な問題が出てきましたけれども、谷山さんから話してもらいましょうか。

谷山 非常に難しい問題だと思いますけれども、30年前に比べても世界全体の経済のパイは大きくなったけれども格差は増えたと言われているように、二つ問題があると思っています。

一つは、経済的なものだけを国の豊かさとして見ていいかということです。国だけではなくて、地域、人間の生き方。僕もラオス、カンボジア、タイ、8年間ずっとこの活動をして現地に行ったのですが、人間は、「おまえは貧しい」と言われたとたんに貧しくなるんですよ。「おまえは何もないじゃないか。貧しいな、貧しいな」と言われると、「ああそうか、貧しいのか」と、自信がなくなって卑屈になっていくんですね。確かに最低限のことはたくさんしている。食うこと、教育も必要でしょう。病気で命が奪われることはあってはいけません。そういうことと、経済でどんどん儲けて豊かになることの競争の中にはまり込んでいくこととは、また別の話だという一つの問題があります。

もう一つは、全体が少しずつ生活がよくなっていく必要があるとしても、結局、簡単な言葉で言えば経済のシステムですが、もっと言えば、ある地域の援助を考えたときに、僕たちは、どれだけ物をどんどん投入すればその地域の役に立つかということを考えます。なかなか底辺に行かないから、底辺に行くようにNGOを使って援助しよう。あるいは融資でもそうです。底辺に行かないから、ではスモール・クレジット（小規模融資）をしようというようなことを言い始めているわけです。問題は、外からお金とか物を投入するということで計るのではなくて、どれだけそこからその地域の人たちが持っていた資源が外に出ていっているかという発想をしなければおかしい。多くの場合、私がいろいろな現場で見て、外から物を投入すれば投入するほど、その地域の資源がなくなっていくんですよ。吸い上げられていく。その循環をどう絶つかということです。例えばお金を出すにしても、地域でお金が回る構造をつくらなくて、外からお金を出して、借金を抱えて、あるいはいろんな農作物を連作して土地をどんどん傷めて干ばつになって人がどんどん出ていくというような、逆の効果になるようなお金の投入の仕方をしてはいけません。

一番怖いのは、復興の過程でそういう地域の資源を自分たちで守りながら豊かにしていくことを抜きにして、一気に市場経済に組み込んでしまうということが非常に危険だと思っています。3年、5年は当然復興で、僕たちは、日本政府もみんなそうだけれども、グラントで支援し続けなければいけないのです。政治が安定しなければ、地方の軍閥がまだ武器を持っている中で援助をどんどん投入したら、場合によってはどんどんまた競争が始まる、戦争が始まるということも十分ありますが、基本的にはグラントなんです。最近、90年代になってから、もう戦争が終わったらすぐに世界銀行とかIMF、ADB（アジア開発銀行）が乗り出して、ローンを始めようとするんですよ。どうやって返すんですか。将来の返済の目的も立っていないのに。そういうふうにして市場経済に巻き込んでいくという形なので、市場経済につながらなければいけないけれども、巻き込み方が余りにも他律的だと感じる。そこが将来的にまた格差を生む恐れがあるかなと思います。

木村 私も似たような意見を持っています。私の場合はカンボジアだけしかおつき合いがないので、10年間カンボジアに行ってきたことからお話しするのですが、内戦、戦争によって非常に疲弊してしまった国を立ち直らせるために、確かに緊急の支援は必要ですが、食糧とか医療とか、あるいは薬が一体どうやってつくられてくるのかということを知ると、知らない、どうしようもないですね。どうも外国人がトラックに乗せて持ってくるから、多分あのトラックの中でできるんだろうと思ってしまったら、これはもうおしまいなので。一番大事なのは、物のつくり方、国の治め方、平和をどうやって守っていくかというやり方を、その国の人たちが自分たちの力で知ること。自分のたちの力で知ることを私たちがお手伝いすること。基本的には教育と人材の育成が私たちがやらなければならない一番大きな問題ではないかということを実感しています。

自衛隊がカンボジアに行きました。道路を直しました。ですけれども、自衛隊が行くことがいいのか悪いのかということ私たちは国内で議論してみましたが、それは単に国内の問題にすぎないですね。カンボジアの人にとってみたときに、600人の自衛隊員が行って600人の自衛隊員だけで道路を直してきました、雨が降って道路が壊れたらどうするんでしょうか。誰も道路の直し方を知らないのです。600人の自衛隊員が行く必要はなかったと私は思います。100人でもいいじゃないか。残りの人はどうして現地の人から採用しなかったのか。ものすごく安いんですよ、向こうの件費は。1ヵ月で2,000円ぐらいもらえればいいほう。失業者が50%以上いるわけです。向こうで道路をつくる失対事業をやって、その人たちが道をつくる知恵を覚える。そのことを手伝えるのが私たちの本当の意味での国際協力ではないかなと思っています。それができなければ、いつまでも貧しさは変わらない。

それと、これは私の独自の意見で、あるいは谷山さんたちとは違うかもしれませんが、テロリストあるいはテロリズムにかかわっている国家はやはり貧困になります。これは、貧困がテロをつくり出すと言いますが、日本でもオウム真理教というテロリストが、豊かさの中で、豊かであるからこそできました。決して貧困だけがテロリストを生み出すわけではない。ウサマ・ビンラディン氏も大金持ちの息子ですし、側近も大変裕福な家に育った外科医です。そういう人たちがテロの思想家です。貧困があると、その人たちの意見に共鳴する人が増えるという土壌をつくり出します。ですから、貧困はテロと無関係ではないのですが、テロを支援する国家が存在するとその国は貧しくなるという方程式も一方にある。それは北朝鮮と韓国とを比べてみればわかることだと思いますし、アフガニスタンも、確かにビンラディンをあそこに連れてきたのはむしろアメリカ側だったと、これは確かにそうなんです、それを保護する立場に立ってしまうと、その国家は貧困から抜け出せない。それは、国際的な支援が受けられないことにもつながるからですよ。そういう意味で、テロと貧困というのは悪循環をつくり出す二つのものだと私は思っています、どちらかだけ一つで説明するというふうには私は思っていないのです。これは私の単なる意見で司会が言うべきことではないかもしれませんが、そんなふうには私は思っています。苑原先生、ご意見ありますか。谷山さんからも意見を伺いたいと思います。

苑原 私は国際組織法とか国際法をやっていると、物事は国際社会全体のあり方にかかわって、その中でみんなが共存していくための秩序づくりというのが国際法なんですけれども、ややもすると一部の力のある人たちがほかの人たちを支配し押しつけるルールになり

がちになるわけですね。それは否定しようがありません。ただし今世紀、20世紀から21世紀にかけて、違った動きが出てきました。

一つは、谷山さんが代表されるようなNGOという人たちです。この人方は、国を単位にして考えていません。国際社会の中で市民が一人ひとり手をつなげていくためにはどのような経済や政治や社会をつくっていくかということ自分の頭で考えていく、そういう人たちが出てきていることです。国家となると、エゴイズムが出てきます。そして戦争がある種手段となってしまう。日本がそれを第二次大戦までやってきましたから、重々わかっていることです。

その中で、国際法の中にも、例えば開発協力のかかわる国際法というのが出てきました。先ほどもいろいろな国際組織の名前が出てきました。IMF、「国際通貨基金」というのですが、要するに世界じゅうに流れているドルとか、そういうお金の流れをコントロールするための仕組みです。例えば急激にお金の価値が低くなったところにはパッとお金を出して何とかドルを支えとか、そういうことをやるのがIMFです。場合によっては、途上国の通貨が危なくなると破産するとなると、日本ではありませんが、不良債権化しているからお金を貸す、そういうことをやるわけです。世界銀行というのは、名前どおり銀行でありまして、一部は市場からお金をもらって、そして途上国向けにお金を貸し付けて、経済開発のためにお金を使ってくださいというふうにするわけです。ややもすると「日本の公共事業の国境を越えた」版になってしましまして、箱物をつくるけれども地元の人には全然役立たないとか、そういうこともあるわけです。

こういう国家間の協力では見えないこと、できないことは、市民が自らの意志と知見によってやっていくしかないということが、もう国境を越えて、それは先進国、途上国を問わず出てきていますので、それはそれで非常に重要なポイントになると思います。

それからもう一つは人権。人間は人間である以上ちゃんと国に対しても国際社会に対しても権利を持つのだ、それは国境を越えてもみんな同じだし、外国の人に対しても同じく適用しなければいけないのではないかという意識が、特に国連ができて以降、1948年に「世界人権宣言」が採択された以降ですけれども、今は国際社会に生きるみんなのいわば常識になっています。ただし残念なのは、その権利の実現がどの国においても100%完全ではありません。それを完全にするために、人々の考えを反映するような政府をつくったり、政府の間で取り決めをつくっていく。そのために国際法をどう使うかということをもみなでうまく活用してほしいと思います。そこで一方的に押しつけられた開発とか、一方的な価値観で貧困にさせられた人たちに、ではどういうふうに分の考えを国際社会にアピールできるかということについて、もう少しオープンな、みんなが利用できるような、そういう仕組みづくりが、今、着実に始まっていると思います。NGOもそういう一人ですし、法律家たちもかなり頑張っているところです。ただ、一番力を持つのは主権者である皆さんで、皆さん一人ひとりが政府に働きかけてください。政府に働きかければ、かなり力が大きくなりますから。ということでございます。

谷山 今の世界は、いま苑原さんがおっしゃったような希望に向かっていく動きと、一方で、格差の問題もありましたけれども、環境破壊も含めて、私たちのコントロールを離れていく自由競争の悪い面の動きと、混沌としている中でなかなか将来像がつかみにくいとい

うことがあります。いずれにしても、私の立場で言うと、今まで国が独占していた外交あるいは経済のコントロールが、市民の手にも戻ってきたということ。しかも、それが別の意味でのグローバルイゼーションという意味で市民連携をすることができてきているということは、将来を考える上でプラスの動きになってきていると思います。

まさしく地雷のことを言うと、ご存じだと思いますが、「ICBL（地雷廃絶国際キャンペーン）」とアフガニスタンの「ACBL」、日本で言うと「JCBL」、こういうところが連携しながらやっていますが、これまで決して廃止できなかったと思われていた地雷の廃絶の運動が盛り上がったということもあります。それに署名していないのは、アメリカとか、中国、ロシアがありますけれども、大きな動きになってきていると思うし、同時に市民連携を通して、僕たちの価値観が変わるのですね。というのは、日本人だけの発想ではない。あるいは、NGO同士も西洋の連中とだけつき合っているわけじゃない。アフガニスタンの人たちとつき合う、カンボジアの人たちとつき合う、あるいはアフリカの人たちとつき合う、紛争の現場にいるパレスチナのNGOの仲間とつき合う。見え方がどんどん違って、新しい社会、それぞれの文化を大事にするというのは僕の原則ですが、同時に、文化の違い、宗教の違いを越えた連帯というか共通の価値観みたいなものをつくり出していくのが大きな力になると思っています。

木村 最後にラウフさんに、アフガニスタンの今の貧しさからどうやったら抜け出せるかというところについて、ラウフさんの思いの丈をお聞きして、終わりにしたいと思います。

ラウフ 一つの例ですが、もらうのは非常に簡単です。あげるのは非常に難しいです。このことは必ず皆さんわかるかと思いますが、アフガニスタン人が今のところなぜあんなきつい生活か。どうしてアフガニスタンはあんなにむちゃくちゃになってしまったか。

例えばロシアがアフガニスタンに侵攻する前に、アフガニスタン人の学生の中に入ってきて、いつでもすごい甘い言葉、私たちは貧乏な人たちのために働きます、貧乏な人たちをサポートします、私たちはフューダリズムとかあいうお金持ちの人たちに反対です、そういう話ばかりだったんだけれども、クーデターになって共産党がパワーをもらって政府になって、その話は全く逆になってしまいました。一番なくなったのは、アフガニスタンの貧乏な人たちです。

どんな世界へ行っても、貧乏な人たちは最初から貧乏です。インドへ行ってみてください。インドの道の上で生まれて、道の上で大きくなって、道の上で死んだ人はいっぱいいます。家もない、土地もない、何もないです。お金持ちの人たちは、自分のソックスは自分で洗わないんです。メイドがやらなければならないから。お金は、お金持ちの人たちが持っているか、武器を買うために使う。

アフガニスタンの中でも全くそのとおりだったんです。今も、貧乏な人たちは非常に貧乏。お金を持っていた人たちは、今も自分のお金はアメリカ、ヨーロッパ、いろいろなところに移したんです。今の問題が出る前に。

これからどうすれば皆さんが同じ生活ができるようになるか。これは正しい勉強が必要だと思います。とっても正しい勉強が必要です。皆さんが困らないように、正しいやり方を考えなければならない。

例えば日本人は、非常に技術がうまいです。すばらしい。私は本当に認められます。最高

です。今までも日本人のやり方は、世界じゅうでとってもすばらしかった。このすばらしさのせいで、どんな日本人、どんなところへ行っても、皆さん「ウェルカム」と言った。今も皆さんが「ウェルカム」と言っていますけど、特にアフガニスタン人は日本人のことをとても好きだったです。日本人のやり方は正しい。すばらしい。挨拶もいいし、話もいいし。どんな国に行っても、政治にノータッチだったよ。迷惑はなかったです。例えばアメリカみたいに、イギリスみたいに、なかったんです。悪魔のやり方じゃなくて、人間のやり方だった。もし今も皆さんがアフガニスタンの中に入って工場をつくったり、会社をつくったり、私たちはとってもウェルカムと言います。ぜひいらしてください。

もちろんお宅たちがアフガニスタンの中で工場をつくって、工場でいろいろ物をつくってお金ができたら、このお金はもちろん日本人も持って行ってください。けどお金がないですね。そのときは、例えば石油、ガスをもらっても、代りに私たちは技術をもらうじゃないですか。いい方法をもらうじゃないですか。勉強もできるじゃないですか。そのときは、もちろんガスとかオイルは持っていても、自分の努力の代りにもらうんですよ。私は、これは反対ではありません。けど、ただ技術の最初を見せてその国に戻して、見せて戻して、それは意味がないです。本当にアフガニスタン人のための幸せが欲しかったら、ちゃんと工場、ファブリック、いろいろなことを考えながらやれば、とってもありがたいと思います。

日本人はウェルカムと、いつも言うと思いますけれども、日本人へのアピールは、アフガニスタン人の中で努力をしながら、これからぜひ頑張ってください。ぜひ、いろいろ工場をつくってください。ぜひ、いろいろなものを、アフガニスタンの将来の幸せのためにつくってください。

ただ、そのときは、アフガニスタン人の宗教には触らないように。アフガニスタンの文化を壊さないように。アフガニスタン人の服を壊さないように。私たちは、自分の文化を非常に大事にします。自分の文化を非常に守りたいのです。イスラムは私たちの宗教ですから。どうしてもイスラムを守らなければならない。ソ連に反対の戦争も、このイスラムを守るための戦争だったんです。守るために、アフガニスタン人は成功しましたよ。ソ連はアフガニスタンからいなくなってしまうましたね。これからアメリカもイギリスもアフガニスタンの中でベースをつくれれば、これは私たちは認められないです。もしアメリカがアフガニスタンの中でベースをつくれれば、必ずアメリカの文化も入ってくるんですよ。イギリスの文化も入ってくる。この辺が、私はアフガニスタン人として認められません。NGO、PKO、そういうことがあればアフガニスタンを直すためにウェルカム、ノープロブレムです。ぜひ来てください。その話を私はアフガニスタン人として伝えたいです。

あとは、総理大臣が「アフガニスタンを壊してもいい。あと直しますから」、この約束を守ってください。私はアフガニスタン人として、日本の総理大臣にお願いしたいです。自分の約束を守ってください。アフガニスタンはもう壊れて、今あんなになってしまいました。ちょっと飛行機は残っていたんだけど、全部壊れてしまいましたね。これからは、日本政府は、アジアの指導者として、責任者として、技術もあるから、すばらしい人々もいっぱいいますから、エンジニア、テクニシャンいろいろいらっしゃるから、ぜひアフガニスタン人のために皆さん頑張ってください、アフガニスタンを助けてください。もちろん、「助ける」という話は、最初、私たちはアピールは神様からなんだけれども、2番目は人間が努

力しないと何にもならないから、ぜひ皆さん、アフガニスタン人を助けてください。ただ、助ける前に、自分の目的をちゃんと説明をしながら、自分の目的をアフガニスタン人に教えながらやると、必ず成功すると思います。お願いいたします。(拍手)

木村 今日、皆さんのお手元に「隣の難民と私たち」というパンフレットが配られています。この中にいろいろな支援団体を書いてあります。そういうところにもし興味があったら、ぜひ参加して、あるいは協力していただきたいと思います。

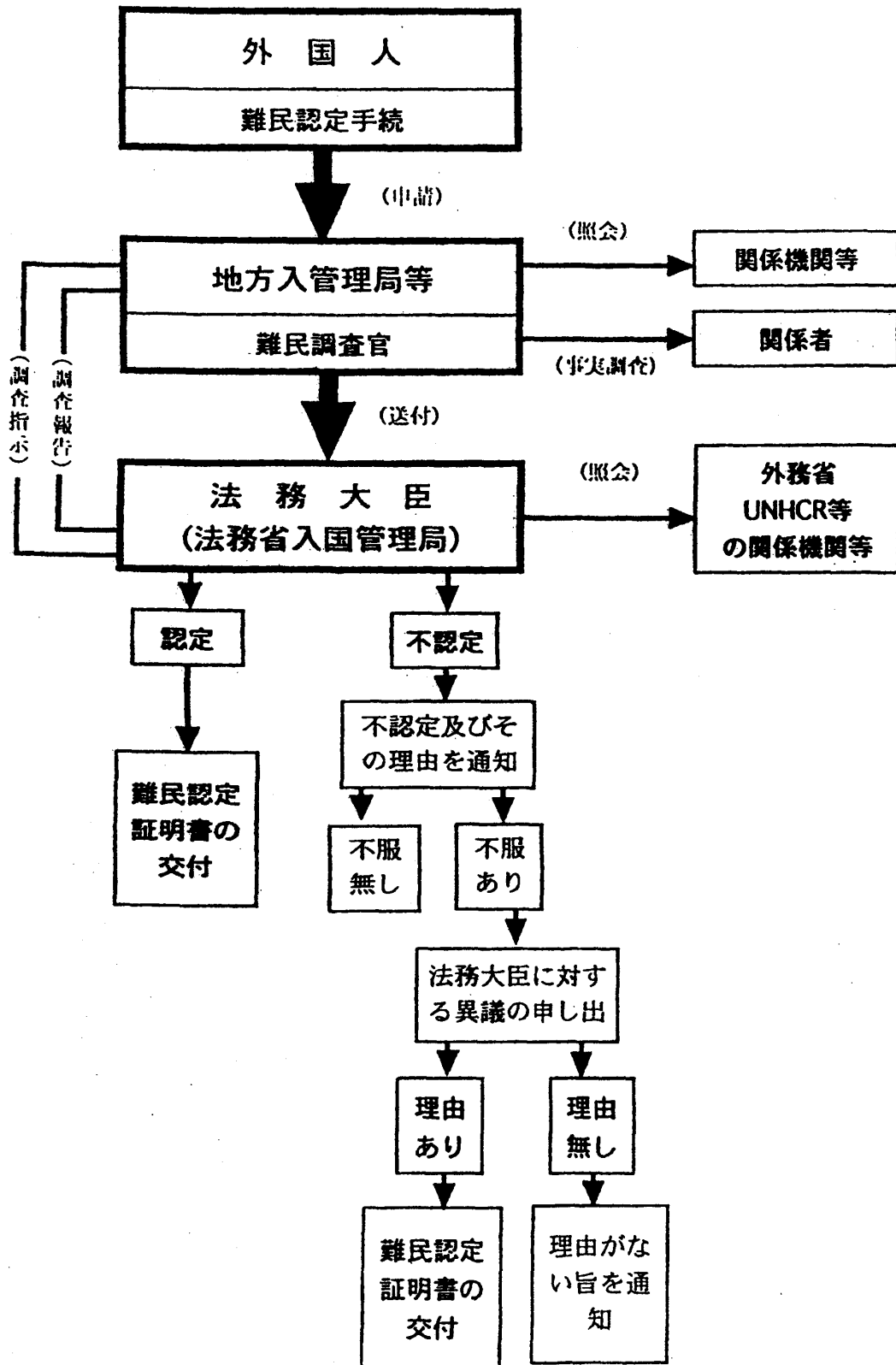
それから、皆さんが、暮れ、正月にいろいろ勉強していただいて、皆さんなりの工夫でアフガニスタン再建のために協力をしていただければありがたいと思います。

それでは、これで終了させていただきます。

— 以上 —

フローチャート・難民認定手続

(法務省入国管理局編：難民認定手続案内より)



こちら特報部 // ニュースの追跡 話題の発掘 03(9471)7242 / Ex-N・tokuho@chunichi.co.jp

「なぜ私は捕らえられたのか。内戦が続く祖国から逃れて来たアフガニスタン人が、東京入国管理局の収容施設で叫ぶ。難民認定の申請中に、同管理局に不法入国で身柄を拘束されたのだ。アフガニスタン難民弁護団は十九日、収容の停止を求めて提訴する。

タリバンの拘束 『トラフマ』強い

収容されているのは、今年六月から八月にかけて来日した九人のアフガン男性で、全員がハザラ人など少数民族。ほとんどがタリバン政権の迫害を受け、身柄を拘束された経験がある。三十代の男性は、面会に訪れた弁護士らに「眠れない」と訴えた。通訳によると「ふつうの人より拘束されることへのトラフマが強い。」「頭が痛い」とも言った。とても疲れ切った様子で、不安でいっぱいだった」と様子を語る。

東京入管局 難民申請中のアフガン人拘束



難民申請者の相談に応じる筒井志保さん。東京都新宿区事務所で。

「なぜだ 教えてくれ」

だ。家族が連行されたまま戻らない人もいる」と言。 NPO団体「難民支援協会」(東京都新宿区)の筒井志保事務局長は「日本も加害する難民条約では、難民は正規のパスポートやビザを持たずに逃げて来ていることを前提にしており、不法入国や不法滞在などを理由に難民に刑罰を科して、全員の仮放免を請求してはならない」として、十九日には収容そのものを「いつどこから出られ指摘し、今回の摘発を批判の不当である」として収容

米テロの情報収集?

「日本信じた人 捕まえるとは」 それだけに、今回の摘発が申請者たちに与えたショックは大きい。同協会事務所に申請者から「聞き取り調査のため入管へ行くねばならないが、行ったら

弁護団、提訴へ

令書発布の処分取り消しを求め東京地裁に訴える予定だ。 弁護団によると、収容者には申請後の聞き取り調査で「ウサマ・ビンラディンについて知っていることはあるか」などと質問された。「情報収集を目的にアフガン人を狙って摘発したと言われ、も仕方がない」という。日本の難民認定は厳しい。同協会によると一九九七年ごろまで認定者は年に一人の状態が続いていたが、国際的な世論の後押しもあり、少しずつ認定者が増えている。そのため申請者数も増え、昨年は二百十六人が申請、二十二人が認定された。証拠不十分などで不認定とされても法務大臣の裁量による「在留特別許可」が与えられた例も増加している。

毎日新聞 夕刊より 2001年11月27日(火)

**アフガンの9人
就労目的で滞在
法相が説明**

森山真司法相は27日午前の記者会見で、難民認定申請中に東京入国管理局に不法入国・残留容疑で摘発されたアフガニスタン人9人に対し法相名で「難民認定しない」との決定を出したことについて、「迫害の恐れを裏

付ける証拠がない。いずれも我が国に庇護を求めて入国したのではなく、もっぱら就労目的で不法滞在している」と強く推定できる状況が分かった」と説明した。

難民不認定の4人を牛久へ、26日に難民認定申請が不認定になったアフガニスタン人4人に対し、法

務省入国管理局は27日、退去強制令書を発表した。同日中に、4人を収容先の東京入管の収容場から第日本入国管理センター(茨城県牛久市)に移送する。

入国管理局によると、4人は第三国への出国などを求めなかったため、送還先は「アフガニスタン」になっている。しかし、現在の国情などから直ちに送還するのは困難で、第三国への出国をさらに模索するとみられる。

毎日新聞 朝刊より 2001年12月14日(金)

**母国のNGOに
5人が窮状訴え
難民申請不認定でアフガン人**

法務省に難民と認められなかった少数民族のアフガン人5人が、アフガニスタン復興NGO(非政府組織)東京会議(13日開幕)に出席した母国のNGOのメンバーに日本での窮状を訴えた。

アフガン中部で農村開発や食糧援助を続ける「アフガン開発人道支援サービス」代表のシャヒールアハマド・サヒブ氏は「豊かに発展している日本が、不遇なアフガン人の難民申請者を助けられず、収容するとは極めて遺憾だ。日本政府には今回の対応を考慮してほしい。私たちがアフガンの代表として招き、丁重にもてなしてくれたように、難民申請者にも対応してもらいたい」と訴えた。【磯崎由美】

**アフガンの非難
難民不認定で
法相を非難**

「アフガニスタン」男性9人が難民として認定されなかったことをめぐり、「アフガニスタン」難民弁護団は27日、東京・隅が岡で会見し、森山真司法相を強く非難した。大貫憲介弁護士は「本人の陳述書など重要証拠の提出を拒否してお

きながら、法相が急いで結論を出したのは、適正手続きを欠いている」と述べた。

森山法相は同日の閣議後会見で「(9人)はもっぱら就労目的で不法滞在している」と発言していた。

また、弁護団は、また内戦状態にあるアフガニスタンに強制送還するのは人道に反するとして、出入国管理法に基づく特別放免申請する方針も明らかにした。

朝日新聞 朝刊より 2001年11月28日(水)

**日本人NGO
アフガン入り**

アフガニスタン国内の難民・困窮者を支援する準備を進めていた非政府組織(NGO)、「コー・スワイン・シヤパン」(CWS)の代表者らから4人余り、無償資金協力費の事務官1人が27日、国連機でイスラマバードからカブールに入った。NGOの日本人スタッフや日本政府関係者がアフガン入りするのは、テロ以降初めて。

東京地裁

民事3部決定(2001.11.5) 第116号執行停止申立事件

むしろ、相手方の採る態度は法の運用に当たって、その上位の規範である難民条約の存在を無視して(はる)に等しく、国際秩序に反するものであって、ひいては公共の福祉に重大な悪影響を及ぼすものというべきである。

東京地裁

民事2部決定(2001.11.5) 第113号執行停止申立事件

仮に客観的には申立人が難民条約上の難民であったとしても、同人を法3-9-条の規定する収容令書の執行により収容することが、難民の移動に対して、「必要な制限以外
の制限」を課するものとは認め難いというべきであるから、本件の収容令書の発付が難民条
約3-1条2項に違反するとはいえない。

d したがって、本件処分が難民条約3-1条2項に違反した違法な処分であるとすると申立人の主張は、採用することができない。

石川 えり「入管行政」

国際人権NGOネットワーク編『ウオッチ！規約人権委員会』日本評論社
1999年版より引用

(表) 難民認定申請および処理数の推移

年 別	申請者数	認 定 者	不 認 定 者	取 下 げ	未 処 理 件 数
1982年	530	67	40	59	364
1983年	44	63	177	23	145
1984年	62	31	114	18	44
1985年	29	10	28	7	28
1986年	54	3	5	5	69
1987年	48	6	35	11	65
1988年	47	12	62	7	31
1989年	50	2	23	7	49
1990年	32	2	31	4	44
1991年	42	1	13	5	67
1992年	68	3	41	2	89
1993年	50	6	33	16	84
1994年	73	1	41	9	106
1995年	52	1(1)	32	24	101
1996年	147	1	43	6	198
1997年	242	1	80	27	332
1998年	133	15(1)	293	41	117
合 計	1703	225(2)	1091	271	117

()の数は、異議申し出後認められた数